

その知見は臨床を変える?

エキスパートが解説! 内科における最新論文

内科医療は日進月歩であり、最新の研究成果が次々と発表され続けているため、われわれ医師の診療観や患者アプローチは日々刻々と変化しています。今回の特集では、臨床を大きく変える可能性の高い研究はもちろん、内科全般で注目を集めた最新の研究論文を幅広く紹介し、各領域の専門家に解説していただきました。これにより、最新論文が実臨床にどのような影響を与えるのかを少しでも感じ取っていただければ幸いです。

選定対象とした論文は、内科関連の学会誌や一般医学誌に掲載された重要なエビデンスはもちろんのこと、社会的に大きな注目を集めた研究、SNS上で大きな話題となった研究も含め、内科医にとって注目すべき最新トピックスを網羅することを心がけました。呼吸器、感染症、代謝、腎臓、循環器、膠原病、消化器、脳神経内科といった内科の各領域のトピックスをバランスよく取り上げており、日々の診療に当たっておられる先生方にとって有益な情報源となることを目指しました。

例えば、2型糖尿病の薬物療法に関しては、日本人の処方実態を考慮し、単に血糖降下効果のみならず副作用も勘案した治療アルゴリズムが2022年に発表され、つい最近(2023年10月)に改定されました。これにより、効果優先の従来の治療とは異なる、より安全性を重視した治療戦略を取ることが適切ではないかと考えさせられます。一方、消化器内科領域では急性膵炎に対する積極的大量輸液が予後改善に繋がらないことが大規模研究で示されたため、従来の治療方針を見直す必要性が示唆されました。最新のエビデンスを理解・取り入れることで、治療方針の変更を迫られる場合も少なくありません。脳神経内科領域では、Alzheimer病治療薬のレカネマブが社会的にも大きな話題となりました。こうした薬剤は専門家目線ではどのように捉えられているのでしょうか。私自身、このようなホットトピックについて本特集の記事を楽

しみにしている読者の一人です。

加えて、関節リウマチに対する新規生物学的製剤の有効性と安全性、心不全の治療戦略見直し、脂質異常症治療への新規薬剤の取り込み方、腎臓病患者での SGLT2 阻害薬の位置づけ、個別化医療への機械学習活用、肺炎治療期間短縮の可能性、肥満以外の NAFLD 重症化リスク、片頭痛治療のパラダイムシフトなど内科医にとって重要性の高い最新知見が多数紹介されています。日々進歩する医学情報をキャッチアップすることは決して容易ではありませんが、プライマリ・ケアの先生方も積極的に最新エビデンスを収集・理解することで、質の高い診療を継続できるはずです。

今回、各領域の最前線でご活躍の専門医の先生方にご執筆いただきましたが、本特集の解説を通じて、エビデンスに基づいた医療がさらに発展していくことを期待したいと思います。医療の変化と進歩を敏感に察知し、新しい知見を積極的に取り入れることが、患者さんへ最善の医療を提供することにつながるのだと思います。本特集が、読者の先生方の診療の変化や新しい治療の可能性を感じ取る一助となれば幸いです。

最後に、本特集立案にご協力いただきました以下の先生方に深謝いたします。

上原由紀先生（藤田医科大学微生物学講座・感染症科）、大西由希子先生（朝日生命成人病研究所）、香坂 俊先生（慶應義塾大学循環器内科）、小林健二先生（市立大町総合病院内科）、皿谷 健先生（杏林大学呼吸器内科）、杉山 徹先生（武蔵野赤十字病院内分泌代謝科）、武田景敏先生（大阪公立大学大学院脳神経内科学）、田辺晶代先生（国立国際医療研究センター病院糖尿病内分泌代謝科）、利根淳仁先生（岡山済生会総合病院内科・糖尿病センター）、中島 啓先生（亀田総合病院呼吸器内科）、矢野裕之先生（沖縄県立中部病院リウマチ・膠原病科）、龍華章裕先生（リウゲ内科小田井クリニック）



谷口俊文

（千葉大学医学部附属病院感染症内科・感染制御部）